

音訳ボランティア

わた なべ のり こ
渡辺典子さん



プロフィール

1936年、岡山県生まれ。岡山大学卒業後、京都へ。その後、結婚を機に大阪府寝屋川市や、自宅を新築した奈良市、夫の転勤で福井市にも転居し、76年から奈良市。音訳講座を受講したのは、最初の奈良時代。音訳のボランティア活動は福井時代から始めた。79年、日本ライトハウス盲人情報文化センターの「音訳技術講座」を受講。85年から音訳指導員。受賞の経歴は、朗読ボランティアに贈られる「西日本地区表彰」(04年、鉄道弘済会など主催)ほか。

録音風景(写真提供・渡辺さん)

感謝の気持ちでボランティア めざす"音で分かる読み方"

視覚障害者に、就労支援や情報提供サービスを行っている社会福祉法人日本ライトハウス(本部・大阪市)の中で、図書館部門として主に点字・録音図書制作と貸出提供サービスの中核となっていてのが盲人情報文化センターだ。ここでは500人以上のボランティアが様々な作業に従事しているが、音訳ボランティアとして後進の指導にも力を発揮しているのが、渡辺典子さんである。

『音訳』とは『音声訳』を略したもので、文字情報を音声に変えること。主にカセットテープに吹き込まれ、録音図書として提供されるのだが、音訳者には、「感情を入れないで、原本に忠実で正確なものを」という姿勢が求められる。読み方に、豊かな表現や個性が現れがちな『朗読』との違いである。

このため音訳ボランティアの希望者の多くは、盲人情報文化センターなどが開催する「音訳講座」を受講。日本語の正しい発声やアクセントの練習はもちろん、固有名詞や古語、写真・図表の読み方などを習得する。

また修了後も、原本に出てくる漢字の読み方や意味などを調べる"事前調査"を通じて、高い技術と根気を身につけるのである。

「私たちが目で見てその状態を音で再現し、目の不自由な人の目の代わりをするわけです」ときれいな共通語で話す渡辺さんは、岡山の生まれ。共通語は、福井在住中に始めた音訳ボランティアで身に付けたものだ。

渡辺さんが音訳ボランティアを選んだ動機は一。

「長男が未熟児で生まれ長期間保育器に入っていたのです。病院のケアが良く健康に育ってくれましたが、『感謝しています』という言葉だけでは足りないと思い、感謝の気持ちを行動で現わすには、目が不自由な方たちの力にならねばと」音訳者への道を決意するのである。

音訳ボランティアとしての実績は、盲人情報文化センターでの奉仕期間だけでも26年目を迎えており、録音時間も同センター分だけで658時間を超えるほどだ(04年6月現在)。ほかにも、

対面朗読やJBS(日本福祉放送)での放送などがある。

現役として音訳するだけでなく、指導員として講師もこなす渡辺さんは、音訳の難しさを「漢字ですね。目で見ればわかるけど、音にすると分からない。同じ音の漢字がいっぱいありますから」と苦笑しながら話す。一方で、「音訳者のいいところは、本来なら手にしていなかった本を読めること」と役得も強調。

印象に残っているのは、約10年をかけて音訳図書の『万葉集』を完成させたことだ。4516首はもちろん、頭注や解説・論文なども音訳しており、90分テープで190巻にもなる膨大なものだけに関係者の評価も高い。

国立民族学博物館に赴任した目の不自由な研究員のために、対面朗読ほかの音訳をする仕事に加わるなど多忙だが、今後については「音訳における読みの技術というか、耳で聞いて誰もが分かる読み方を根付かせられれば」と話していた。

(文・脇本勤 / 表紙写真・水谷正厚)